

事例31

< 事例概要 >

迷入

- ① 70 歳代、スタンフォードA型大動脈解離、進行性核上性麻痺で意思疎通困難、嚥下障害がある患者。
- ② 栄養状態改善のため、中心静脈カテーテルを留置予定。
- ③ BMI 21.6 kg/m²。高度脱水あり。超音波で内頸静脈虚脱あり。抗血栓薬の使用は無。
- ④ 右内頸静脈よりリアルタイム超音波ガイド下で5 回穿刺。プローブを当てると内頸静脈がつぶれるため、穿刺時はプローブを外した。ガイドワイヤー挿入時に抵抗があったが、超音波の短軸像で位置を確認後、カテーテルを挿入。逆血はなかったが薬液の注入はスムーズであった。X線でカテーテルの蛇行を認めるが位置異常はないと判断し、輸液ポンプで輸液開始。輸液開始3 日目、呼吸困難感、呼吸促迫軽度あり、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO₂）80%台へ低下。その翌日、意識レベル低下し、CT で解離腔へのカテーテルの迷入と解離の増悪を認めた。輸液開始から約2 週間後に死亡。
- ⑤ 死因は、大動脈解離進行に伴う右冠動脈閉塞による心筋梗塞（右鎖骨下動脈・右腕頭動脈付近の解離腔内に留置したカテーテルから注入された輸液による圧力が影響した可能性）。死亡時画像診断（Ai）有、解剖有。